



# 対話の場にある懸念を解消するファシリテーション の在り方の検討 —オンライン哲学カフェの実践から—

三井, 規裕  
稲原, 美苗

---

**(Citation)**

哲学対話と当事者性：2019-23年度科学研究費補助金基盤研究(B)（課題番号19H01185）「哲学プラクティスと当事者研究の融合：マイノリティ当事者のための対話と支援の考察」研究成果報…

**(Issue Date)**

2024-03

**(Resource Type)**

report part

**(Version)**

Version of Record

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100486372>



# 対話の場にある懸念を解消するファシリテーションの 在り方の検討

## ーオンライン哲学カフェの実践からー

三井 規裕（桃山学院大学）

稲原 美苗（神戸大学）

### 1 はじめに

本稿では、哲学対話の実践やサポートを行っているカフェフロを通じて、著者らが2020年から2年間オンライン上で開催してきた「HC Café ～哲学対話の部屋～」について報告する。その中でも特に、オンライン上で参加者の対話を適切に促進するよう努める進行役であるファシリテーターがどのように場に関わっていたかに焦点を当て、参加者が抱える不安を解消していくことの重要性について述べる。

オンライン上での哲学対話に取り組むようになったきっかけは、2020年1月に新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染者が国内で確認され、わずか数か月で感染者が拡大していったことにある。2020年4月には緊急事態宣言が出され、外出自粛などが求められるようになっていった。そうした状況の中で、著者らはどのような対話の場を提供できるのかを考え、既実践されていた事例を参考に2020年11月からオンライン上でHC Café ～哲学対話の部屋～（以下、HC Café）と名付けた哲学カフェの実践を開始した。オンラインでの哲学カフェの参加者層は幅広く、異なる世代、異なる性別、異なる立場、異なる地域の人々から参加があった。

### 2 HC Café～哲学対話の部屋～実施の理由

HC Café をオンラインで開催するに至った理由は主に2つである。

1つ目は、ソーシャルディスタンスによる社会的孤立や外出自粛などの制限がある中で、当時は対面で人と人の接触を避けるような空気感が強くなり、そうした時間が続くことで孤独を感じる人たちがいることを憂慮していた。こうした状況ではいろんな人と対面で話す機会は作りにくい。実際、2021年2月に実施された「日本の新型コロナウイルス感染症と社会に関するインターネット調査」の結果によると、コロナ過では孤独感等が悪化し、自殺念慮に影響していたことが明らかにされている(Hirokazu T, et al 2023)。つまり、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）によって、他者との関わりが少なくなっていると感じていたことから、対面以外の場で集まり、対話の場を作りたいという思いがあった。

2つ目は、学生が参加できる場を作り、対話を通じて自分を肯定的に捉えなおす機会としたいという点である。著者らは、HC Caféを学生の学びの場としても生かしたいと考えていた。具体的には神戸大学で開講されているGSP（Global Studies Program）の学生の参加である。このプログラムは、グローバル社会の課題解決を目指して多様な人々と協働し、その中でリーダーシップを発揮していくために必要な力を学ぶことを目的に開講されている。多様な人々と協働をするためには価値観の違いを受け入れ、その違いをどのように自分自身で受け止めるかを考えていかなければならない。それは価値観を一致させることでも、お互い価値観が違いうで終わることでもない。多様な人々と協働するためには、対話を通じて違いを直視し、それを自分の中でどのように位置付けながら関わっていくのかを考え、伝える経験が必要である。

この2つの理由から、オンライン上でHC Caféを開催するため行動に移していったといえる。

### 3 HC Café～哲学対話の部屋～の概要

HC Caféが目指していたのは、提示されたテーマについて皆で話し、聞き、考えるというシンプルなプロセスに集中して対話することである。参加者は自分の経験に即して話すとともに、テーマについて多種多様な意見や論点、語り方があることを体験する。そして、立場や考え方の異なる他者とのコミュニケーションや自分が素朴に聞きたいことを問うという態度を学ぶことも大切にしてきた。多角的な視点を持つためには、異なる他者を理解するよう努め、何をどのように考えれば良いのかという「答えのない問い」に対して真剣に向き合える態度を習得していかなければならない。

HC Caféでは対話のテーマは、参加者の意見を参考にしながら、著者らが問いの形にして設定していた。当時の社会的な状況を反映する問いについて語る場にしたいと考えていたことから「なぜ学校に行かないといけないのか？」「安全・安心って何なのか？」「ルッキズムとどのように向き合うのか」「結婚という制度についてどう考えるか？」などをテーマにすることが多かった。また、こうした問いに関連するような問題に一人で悩んでいる当事者にできれば参加してほしいという思いも込められていた。これらのことを表現する案内文を添えて、開催案内をカフェフィロのWeb上で行った。

オンラインで実施するため、募集では以下の点を工夫するようにしていた。なお、実際の募集のページは図1の通りである。まず、定員は10名とした。初めて開催した時は20名としていたが、オンライン上でできるだけ全員がゆっくりと話すこと、考える時間を維持することは、参加人数が多くなると2時間の実施時間では難しかったことが理由として挙げられる。また、学生の参加はできるだけ受け入れたいということもあり、一般の方のWebでの募集人数は10名を上限とした。次に、進行役の役割を2人で分けたことである。1人はファシリテーターとして、参加者が発言する機会を確保することや画面上から読み取れる参加者の状況把握に集中し、もう1人はチャット上で全員の発言の記録をできるだけとるようにした。こうすることで、参加者は発言記録を遡ることができ、「あの時の○○さんのお話についてなのですが、質問してもいいですか」というような過去の発言で気に

なったことを質問することを可能にしていた。

## 10 HC Café ～哲学対話の部屋～ なぜ学校に行かないとい けないのか？ 9 オンライン

コロナ禍において、学校に行かなくてもオンラインで学ぶことが可能になっています。しかし、子どもたちと保護者たちには学校に行かなくてはいけないという空気があり、その空気感は時にしんどさを生み出していると思われる。多様な学びが必要とされていますが、実際はどうなのでしょう。今回、「なぜ学校に行かないといけないのか？」をテーマに皆さんとこの問いについて考えたいと思います。

- 日 時：10月9日（土）14:00-16:00
- 場 所：Zoomによるオンライン（リンク先は後日連絡）
- 交 通：オンライン
- テーマ：なぜ学校へ行かないといけないのか？
- 進行役：稲原美苗（神戸大学）、三井規裕（関西学院大学）
- 参加費：参加費：無料（要申し込み）
- 定 員：10名
- 備 考：Zoomを使用します。アクセス先は開催日前日の13時までに送信します。13時以降ご確認いただき届いていない場合は、申し込み受付メールに記載のあるメールアドレスまでお問い合わせください。上記時間までにアクセス先が届かない時は、お問い合わせください。
- 主 催：神戸大学大学院人間発達環境学研究所ヒューマン・コミュニティ創成研究センター（ジェンダー・コミュニティ支援部門）
- 協 力：カフェフィロ

図1 カフェフィロ上での募集案内

引用元：<https://cafephilo.jp/events/event/cafephilo-2062/>（閲覧日：2023年11月23日）

HC Caféは、毎回2時間の実施とした。実施に際して必ず、対話のルールについて資料を提示しながら説明し、参加者の緊張を少しでもほぐすため、アイスブレイクを行っていた。対話のルールは「自分の言葉で語る」「素朴に語る」「発言・聞く・発言・聞く」「ファシリテーターの役割」の4つであった。特にファシリテーターの役割については、HC Caféを経験していく中で入れざるを得ないものであった。その理由としてはどうしても話が長くなること、フラストレーションが溜まると画面越しでもわかるような態度で、キツくなる参加者もいたからである。ファシリテーターの役割を説明する際に補足していたのは、①「長時間お話されるようでしたら、お声がけします」、②「他の人の考えを批難したり、中傷したり、自分の信条を一方向的に押し付けたりしたら介入します」、③「ファシリテーターも参加者になる時があります。その時は素朴に質問するかもしれません」であった。

#### 【対話の場にある懸念を解消するファシリテーションの在り方の検討】

①については、対話をしたいと思ってきている方が多く、いざ話すとなるとどうしても時間をとってしまう人もいる。この場合、場に起きるのは特定の人語り偏ってしまうことで、聴く側が自分の言葉を語れない時間が増えてしまう。2時間という制約があることを考慮し、ルールとして毎回理解してもらった。

②は、まれに自身の思っていたような場になっていないことに対するフラストレーションを表現してしまう人もいる。状況によるのだが、場の不快感が高まるようならば、「○○さんは、どうしたいとお考えですか？」という問いの形で介入し、その方の声を丁寧に聴くようにした。

③はファシリテーターもどうしても質問したい時がある。だが、ファシリテーターが質問を頻繁にするような対話は、参加者の主体性を損なう危険がある。そこで、このルールを実行する条件としては、場の沈黙があまりにも長く続く時かどうしても質問したい時のみとした。後者は毎回1つあるかないかぐらいである。参加者同士の対話が行われている時は、他の参加者がファシリテーターの聞きたいことを聞いてくれることが多い。したがって、それほど頻繁にファシリテーターが質問することはない。ただし、ファシリテーターが質問する時は必ず、「すみません、一旦ファシリテーターも1参加者になります」と言い、質問とそれへの返答が終わったら、「すみません、ファシリテーターに戻りますね」と宣言をしていた。

## 4 哲学対話におけるファシリテーション

HC Caféは、対話を通して新しい考え方、物の見方、思考の深まりを少しでも体験できるように意識された場であることはこれまで述べてきた。ここからは、こうした対話の場は参加者が中心となり作り上げていくことを前提にしつつも、進行役であるファシリテーターが、場の導入部分でどのように関わることが適切かについて説明する。

哲学対話においてファシリテーターは、参加者の主体性を信頼しつつ話しやすい雰囲気を作ることを意識しなければならない。梶谷(2018; p.235)は、哲学対話のファシリテーターの役割を「みんなで協力し支えるという心構えが重要で、それを参加者にも伝えなければならない。そして進行役は自ら参加者の一人として、いわば対話のルールの体現者となるのがよい」と述べている。具体的には3つの点を意識していく必要がある。まず、ファシリテーター自身が率先して些細なことや当たり前のこと、くだらないことを言って、参加者の発言のハードルを下げる。次に、誰かが人に対して否定的なことを言ったら、すぐに注意する。最後に、誰かが難しい言葉を使ったり話が混乱していたりするなど、分からないことがあれば、すぐに質問することが必要であると述べている。また、寺田(2021; p.135)も、参加者の緊張をほぐすことによって場の雰囲気を和やかにすることが必要であると述べている。つまり、対話をはじめるとあって、ファシリテーターは参加者の主体的な参加が可能になる場を作っていく必要があると言える。

また、参加者が主体的に参加できるようになるために、ルールを提示する必要がある。河野(2020)は哲学対話のルールは実践家によって違いがあるものの、共通している部分は多いと指摘している(表1)。例えば、「互いの人格を尊重すること」「他者の意見を傾聴

【対話の場にある懸念を解消するファシリテーションの在り方の検討】

すること」などの参加者同士で互いを大切にしあうことや「どんな意見や質問を出しても構わない」「話したり、考えたりしている間は待ってあげること」「急がないこと。じっくり考えること」などがある。特に場の導入部分ではどんな意見を出してもいいし、考えることのできる場にするためのルールは、基本的なルールとして共通していると言える。堀越（2020；p.169）は、ファシリテーターが参加者に哲学対話の概要と心構えを説明し、マインドセットが共有されているかを注意しながら見ていくことが、最も重要な哲学対話の空間設計であると述べている。つまり、哲学対話の開始前後の時間は参加者の緊張をほぐすことに注力すべきであり、そのためにファシリテーターの振る舞いやルールは欠かすことができないと考えられる。

さらに、ファシリテーターは余白を意図した進行を心がけねばならない。こども哲学を実践している河野（2014；pp.114-116）は、ゆっくり話す、ゆっくりと進行することとして、「考えている時間を待ってあげること、発言するのに言葉を選んでいるときにも待ってあげること、みんなで沈黙考する時間を大切にすること」等が大切であるという。また、ファシリテーター自身もゆっくりと話すことが必要であると述べている。こうした雰囲気

表 1 哲学対話のルール例 （河野 2020；pp. 212-213）

ルール例	
1	互いの人格を尊重すること
2	他者の意見を傾聴すること
3	誰でも同格の人間として話し合うこと
4	その場をひとりで専有しないこと
5	どんな意見や質問を出しても構わない
6	話したり、考えたりしている間は待ってあげること
7	急がないこと。じっくり考えること
8	他人の意見に応答（質問）してあげること
9	ひとつの意見を理解するためにしっかり質問すること。例えば、「なぜ（理由）」、「どういう意味（意味・定義）」、「具体的に言えばどうなりますか（具体化）」、「証拠や具体例はありますか（実証性）」、「いつでも当てはまりますか（一般化）」、「こういう場合にも当てはまりますか（反例）」、「本当にそうでしょうか」など
10	発言するときには、前の意見と関係性を示すこと。賛成、反対、質問、別の角度からの意見、話題を変えるなど
11	自分の経験や考えで話すこと。何かの権威に頼らないこと
12	結論が必ずしも出なくてもよい
13	対話の後も考え続けること
14	ファシリテーターは進行の助けをするのであって、答えをだすためにいるのではない
15	自分の意見が変わってもよい
16	調べれば分かることではなくて、みんなで話し合うべきことを問いにする
17	すべての人が参加する

をつくるのが安心して話せる場につながることも指摘されている（特定非営利活動法人こども哲学おとな哲学アーダコーダ 2019; p.63）。つまり、哲学対話の始まりの時間帯は、全員がゆっくりできるよう配慮する方が良いと言え、そうした時間を作りながら進行をしていくことで、全員が場に馴染むことができていくと考えられる。したがって、余白を意図した進行が重要であると言える。

ここでは、ファシリテーターが参加者と共に哲学対話の場を作る上で重要な導入部分について検討してきた。これ以外にも参加者の関係性を作るための役割もファシリテーターには求められる。哲学対話は参加者の主体的な参加がなければ、成り立たないことが多くあるものの、それだけに委ねるだけでは十分でないこともある。そうした状況の中で、場の状況をよく観ながら、聴きながら参加者の主体性を損なわないよう配慮しながらもファシリテーターは場の舵取りをしていかねばならない。こうした点を参考にしながら、オンラインでの哲学対話において、ファシリテーターが何を観て、聴くことが重要なのかについて検討していく。

## 5 オンライン哲学対話における懸念の解消の検討

オンライン哲学対話にはそれぞれメリットとデメリットがある。メリットは、遠隔でできる、気楽さ、発言のしやすさ、多様性などがある。一方、デメリットは、オンライン環境整備の必要性、セキュリティとプラバシー、時間がかかる、場所性や共同性の弱さなどがあると言われている（河野 2021 ; pp348-354）。これらは、運営面や対面との違いなどの点からその特徴が整理されている。こうした特徴があることを認識した上でオンラインでの哲学対話を実践することは重要であるものの、実際の対話において、オンラインだからこそファシリテーターが意識しなければならないことがある。そこで、HC Caféで実践してきたオンライン哲学対話においてファシリテーターが意識しておくこと、それをどのように実践するかについて検討する。

まず、初めて出会う人とグループで何かを行うときは、参加者の抱える不安を軽減していく必要がある。Gibb(1964)は、グループの中で参加者自身の持つ恐怖や不信感を意識的に軽減していくことが必要であると指摘している。恐怖や不信感には4つの懸念(不安)があり、①自分が他者から受け入れられているかどうか等の不安からくる「受容懸念」、②この場でこんなことを話してもいいのかといった不安からくる「データの流動的表出懸念」、③取り組みに対する興味・関心、自分たちがやっているという実感と関係する「目標形成懸念」、④誰かにやらされている、特定の人に影響を受けているといった影響関係に関する「社会的統制懸念」がある。つまり、初対面の人が多い場では、こうした懸念が特に現れやすいと考えられる。また、オンラインの場合こうした懸念を解消する取り組みとしてアイスブレイクがあるものの、筆者らが実践した時間を考えると十分な対応とは言えず、対話が始まっても懸念が解消されないまま進んでいたと考えられる。

こうした状況の中で、進行をする上で意識していたことは、特に受容懸念への対処である。この場のメンバーは一人一人を大切にしているという空気感をモニター越しに出すために、ルールの説明だけでなく、ファシリテーター自身がゆっくりと話しながら、参加者

## 【対話の場にある懸念を解消するファシリテーションの在り方の検討】

の発言機会を確保していた。例えば、対話がスタートしてもなかなか発言が出ないことがある。そうした時は、ファシリテーターは表情を柔らかくし、沈黙し続ける。これは、誰が口火を切るのだろうかと周りを見ていたり、問いに対して自分の経験を思い出している人がいたりする。そうした時間を奪わないことが何よりも重要で、経験上1分から2分程度沈黙を保てれば、参加者の誰かが必ず画面越しに手を挙げてくれる。そうしたタイミングを逃さず、ゆっくりと対話をスタートさせるようにしておくことが重要である。

オンラインでは1人が話し始めたら、発言者の語りを聴きながらモニターを徹底的に観察することが重要である。参加者は全員がモニターをオンにしていなくてもある。HC Caféでは、顔を出したくない人がいてもいいと伝えている。この時オンになっていないと何もわからないと思われるが、そうではない。確かに顔は見えないが、音声をオンにしたり、オフにしたりという行動をとっていたり、一瞬だけ手を上げる機能を使ったりしている人もいる。また、通信環境の影響で接続が切れやすい人もいる。そういう人でも何度もアクセスしてくれてくるということは、この対話に関心を持っているということだと考えられる。画面は暗くともこうしたモニター越しでもわかる微妙な動きを観察しておくことで、推測できる情報は多得られる。但し、すぐに対象者にファシリテーターから声をかける必要はない。あくまでモニターをオンにし自ら話す人を優先しながら場を動かしていけば良いと考えている。

対話が始まって30分ほどしても発言がない人がいたら、タイミングを見て一言声をかけることも大切である。特にモニターオフの人は、まだ受容懸念を解消できていないと思われるため、この段階で場のメンバーの一員として受け入れていることを意図的に伝えるために声をかけるようにしていた。対面でも同様のことは重要であるが、HC Caféではオンラインだからこそ、そうした意図的な関わり方をファシリテーターとして行っていた。こうした受容懸念の軽減が早い段階で進んだ時、参加者が言い難いことを発言してくれることも起きてくる。

参加者が、問いの当事者であるとき、その語りは場の空気を澄んだ状態に変え、問いへの集中力を高めることがある。オンラインでの対話のデメリットとして時間がかかることを挙げられる。具体的には、話し手の表情や動きなどがわかりにくいため（画面オフの時は全くわからない）、誰に対して話しかけているのかがはっきりしないことが指摘されている（河野 2021 ; pp352-353）。HC Caféでもこうした状況は多々あり、特に対話が始まってから40～60分は深まりにくい状態がよく見られた。対話の深まり方は、その時によって異なるのは当然であるが、当事者による経験に即した本音の発言が最も問いへの集中を高めるきっかけとなる。社会が正しい、そうあるべきという眼差しに息苦しさを抱えている当事者が、自分の経験から語り、あるべきとされる社会からの眼差しに真っ向から問いを投げかけること、そして他の参加者の意見が聞きたいと素直にいうことで場は変化していった。こうした状況が生まれると受容懸念だけでなくデータの流動的表出懸念は徐々に軽減されていくと思われる。こういう状況になったならば、ファシリテーターは参加者が他者を非難、侮辱しない限り何を言ってもいいし、問いを重ねることを推奨していくことができる。



## 【対話の場にある懸念を解消するファシリテーションの在り方の検討】

このように、オンライン哲学対話のファシリテーターをする上で、参加者が抱える懸念（特に受容懸念とデータの流動的表出懸念）に注意を払っていたと言える。星野（2019）は、初期のグループ学習の場では受容懸念やデータの流動的表出懸念がみられるといい、ファシリテーションを実践する上で、学習者は懸念を持って集まってきていることを意識し、懸念に対して状況に応じて働きかけなければならないと指摘している。そのためには、それぞれの懸念や不安を解消していくためのプログラムを適宜取り入れながら、場を作っていくべきであると述べている。つまり、2時間と限られたオンライン哲学対話の場では、不安を解消するプログラムの代わりにファシリテーターは画面越しに得られる情報を観察し、見守りつつも、その時の対話の場の状況に応じて働きかけることで、参加者の抱える懸念をできる限り軽減するように努めることが必要であると考えられる。

## 6 まとめ

本稿の目的は、オンライン哲学対話の実践を振り返り、参加者の対話を適切に促進するよう努める進行役であるファシリテーターがどのように場に関わっていたかに焦点を当て、参加者が抱える不安を解消していくことの重要性について検討することであった。

哲学対話においてファシリテーターは、参加者の主体性を信頼しつつ話しやすい雰囲気を作ること、参加者が主体的に参加できるようになるために、ルールを提示すること、余白を意図した進行を心がけねばならないことについて述べた。また、哲学対話は参加者の主体的な参加がなければ、成り立たないことが多くあるものの、それだけに委ねるだけでは十分でない。特に2時間と限られたオンライン哲学対話の場では、ファシリテーターは画面越しに得られる情報を適切に観察し、見守りつつも、その時の対話の場の状況に応じて働きかける必要がある。オンラインで実施する際は、参加者の抱える懸念をできる限り軽減するよう、対面での実施以上に努めることが必要である。

謝辞

JSPS 科研費 JP19H01185 の助成を受けたものです。

参考文献

Gibb, J.R. (1964) 「信頼関係形成のための風土」 In Bradford, L.P.et.al. *T-Group The-ory and Laboratory Method*, John Wiley & Sons, Inc 三隅二不二（監訳）感受性訓練，第10章，1971，日本生産性本部。

Hirokazu,T.,Midori,M.,Haruhiko,M.,Miyuki,A.,Ryo,O.,Takahiro,T.(2023).Impact of loneliness on suicidal ideation during the COVID-19 pandemic: findings from a cross-sectional online survey in Japan. *BMJ Open*,13(5), pp.1-10.

星野欣生（2019）「ファシリテーションの人間観 ファシリテーションは人をどうみているか」津村俊光，星野欣生（編）『実践人間関係づくりファシリテーション』金子書房，pp.1-14.

堀越耀介（2020）『哲学はこう使う 問題解決に効く哲学思考「超」入門』実業之日本社。

【対話の場にある懸念を解消するファシリテーションの在り方の検討】

- 梶谷真司（2018）『考えるとはどういうことか 0歳から100歳までの哲学入門』幻冬舎新書.
- 河野哲也（2014）『「こども哲学」で対話力と思考力を育てる』河出ブックス/
- 河野哲也（2020）『人は語り続けるとき、考えていない 対話と思考の哲学』岩波書店.
- 河野哲也（2021）「付録 オンラインによる哲学プラクティス」河野哲也（編）『ゼロからはじめる哲学対話—哲学プレクティス・ハンドブック』ひつじ書房, pp344-354.
- 寺田俊郎（2021）「対話の実践方法 対話の進め方・終わり方」河野哲也（編）『ゼロからはじめる哲学対話—哲学プレクティス・ハンドブック』ひつじ書房, pp.133-141.
- 特定非営利活動法人こども哲学おとな哲学アーダコーダ（2019）『こども哲学ハンドブック 自由に考え, 自由に話す場の作り方』アルパカ.